



記事

- コンニャクの話
- 白色度について
- ちかごろ、都会で流行るもの



コンニャクの話

寒さも日増しに厳しくなってきていますが、いかがお過ごしでしょうか。さて、寒くなつくると温かい鍋が恋しくなつくるのではないかでしょうか。群馬で鍋といえば、ネギとコンニャクですね。そのコンニャクは、食べるだけではなく、実は紙に使われていました。

紙子(かみこ)または紙衣(かみこ)と呼ばれるものにコンニャクが使われていたのです。紙子とは紙でできた着物のことです。楮で厚く漉いた和紙にコンニャク糊や柿渋などを塗りこんで防水性や強度などを持たせてあります。また、軽くて保温性もあるそうです。しかし、そのままでは硬くゴワゴワしているので、手でよく揉んで柔らかくしてから使ったそうです。

平安・鎌倉・室町時代は僧侶の法衣などに、戦国時代に入ると武将が陣羽織などにしたり、刀の鞘袋、道服など、江戸時代には一般庶民にも使用されるようになり、防寒着などとして広く使われていたそうです。

また、江戸時代は呉服屋の大福帳などにもコンニャクを使った紙が使われていました。なぜ、コンニャク紙が使用されていたのでしょうか。火事になった際に、大福帳を一番に持ち出し、井戸に放り込んで逃げるそ

うです。大福帳は顧客情報が記載されていますので、商品よりも何よりも大事だったわけです。その一番大切な大福帳を守るために水に強くしかも、墨がにじまないコンニャク紙を使っていたそうです。

コンニャク紙は、和紙を買ってきてコンニャク糊を塗ればいいだけなので、簡単にできます。試されると面白いかもしれません。

ちなみに、全国で生産されている80%以上は群馬県産だそうです。コンニャクがなぜ群馬県での生産が多いのでしょうか?コンニャク精粉は水分量が少ないとほど純度が高く品質よいとされます。群馬県は秋から冬にかけて日本でもっとも空気の乾燥度が高い地域だそうです。そのため、群馬県産のコンニャク精粉は水分量が少ない高品質のものができるのだそうです。

(T)



白色度について

今回は、よく耳にする白色度について簡単にご説明します。

白色度とは、紙の白さの尺度で、JISで規定されています。紙を白色度計というもので測定して、完全拡散反射面(反射率が100%の理想的な反射面)に対する反射量の比率で示します。

光を物に当てるとき、光の一部は透過し、一部は反射し、残りは吸収されます。すべての光を吸収すれば白色度0% (真っ黒)です。すべての光を反射、拡散すれば完全拡散反射面ということで白色度100% (真っ白)になります。数字が大きくなるほど白くなるということです。

スギウラ株式会社
営業一部
〒370-0006
高崎市問屋町2-2-8

電話番号
代 表
027-361-5808
営業一部
027-361-5734

Fax
027-361-1272

当社 Web サイト
現在、リニューアルにむけて、作成中です。



お気付きの点や質問、疑問などありましたら、ご遠慮なく営業または、下記までお問合せください。

お問合せ
メールアドレス
sg-takahashi-t
@kamisugiura.co.jp

しかし、人間が見た紙の白さと機械で測定した紙の白さは必ずしも一致しません。そのため、人間の目で見て感じる白さを出すために、着色染料や蛍光増白染料を添加して青味にして、増白している紙もあります。

印刷する場合は、紙の白さによって印刷発色のコントラストに変化がでます。そのため、印刷効果や印刷イメージに大きな影

響を与えます。印刷するときは考慮する必要があります。

一般的な白色度は、重袋用クラフトで45~50%、新聞紙で55%程度、バージンパルプの上質紙は80%程度です。

ちなみに、三菱製紙では、国内最高峰の白さのリアルホワイトグロス(ISO白色度100%)、リアルホワイトマット(ISO白色度105%)があります。(T)

ちかごろ、都会で流行るもの

昨今は、どこの業界に限らず広告費は減る一方で、なかなか広告系印刷物の受注もままならない状況です。チラシをはじめ、新聞広告やDMなどもアタマ打ちの中、より高い広報効果を得るために実際に様々なアイデアの広告系印刷物が見られるようになってきました。今回は、その中で、最近東京などで流行っているものをお紹介いたします。

クラフト紙

包装紙としてなじみの深いクラフト紙ですが、これを冊子の本文やチラシに使う場合が増えているようです。クラフト紙独特の手触りや、上質などとは明らかに違う色、そしてなにより特殊紙などに比べ低価格などなど。この辺が広告主さんにウケているようです。もちろん多色刷りには適しませんが、一考の価値はあるのではないでしょうか。

透ける紙

下の印刷内容が透けて見える、といえば真っ先にトレーシングペーパーが思い浮かびます。しかし、それだけではありません。薄い特殊紙を使って視覚効果を高めるという方法もあります。例えばフレーバーボンドの薄いものを、あの波紋に合わせ、雲や波を印刷するとか。また、タントセレクトの薄いものは、ハードカバー本のカ

バー用紙として、今、大変に人気があるようです。さらに本家のトレーシングペーパーも勿論、負けていません。最近、DMで中が透けて見える封筒というのが散見されます。これは封筒のオモテ、内側、内容物と印刷することで、3段階に分けて透け具合を調整できます。それによって、高い視覚効果が期待できます。

見えない

通常、広告というと出来るだけ印刷内容がハッキリ見えるようにすると思います。しかし、それを逆手に取ったのがこのアイデアです。例えば、青い紙に青系統の色で文字や絵を印刷する、ニスを部分的に引く、そうすると当然よく見えません。よく見えないから、ちゃんと見ようと結果的にその広告物を注視するというわけです。パッと見て、1色ベタ塗りにしか見えないので、目を引きやすいのもポイントです。これもDMをはじめ、本にも使われることが増えた、人気の手法です。ほかにも、光源のそばに貼られるポスターのグロスを強めるというやり方で、この「わざと見えにくくする」技が使えます。

いかがでしょうか。お金のかかるものから、それほどでもないものまで、アイデア次第でいくらでも応用可能なのが広告の世界です。これらはあくまで、いま流行っている例ですが、まだまだ可能性が眠っているようには感じませんでしょうか。(A)